

共に生きるということ

福岡県 筑紫女学園中学校 2年
原田 碧（はらだ あおい）

「人権」について語る時、私達はしばしば障がいをもつ人全てを一方向的に「弱者」とみなし、健常者が彼らにどれだけ多くの手を差し伸べることができるかを問題にします。私は、このことに疑念と戸惑いを感じるのです。

私が小学生の頃、同級生のお父さんにKさんという目の不自由な方がおられました。その方は高校生の時、所属していた部活動の理科実験の際、爆発事故で両目を失明するという不幸に見舞われたのです。そんなKさんが、ある時、人権学習のゲストティーチャーとして私達生徒の前で話をしてくださることになりました。

少し緊張ぎみで待つ私達生徒に、Kさんは微笑みながら

「これからみんなで目をつむったまま、水を汲みに行きましょう。」

と言われました。コップを手にした私達は、しっかり目を閉じ、教室の壁をつたいながら、恐る恐る足を進め、廊下の先にある手洗い場まで行きました。そして、手探りで蛇口をひねり、コップに水を汲み、飲みました。みんな口々に、

「目が見えないのって怖いよねー。」とか、

「どこに何があるのか分からないねー。」

などと言いながらも、なんとか水を飲むことができました。

そんな私達の様子を見ていた担任の先生が

「目の見えない方達が、どれほど大変で、不自由な思いをされているのかよく分かりますね。」

と言いました。

その時です。Kさんが、

「先生、そうではないのですよ。私は子供達に、目が見えなくてもちゃんと一人で歩いて行き、水を汲んで飲むことができる。目の見える人とは、方法が少し違っているけれど、訓練や慣れることで、みんなと同じことが何でもできるということを知ってほしかったのですよ。」

と言われたのです。それを聞いて、私は小学生ながら、少し申し訳ないような、恥ずかしいような、それでいて勇気づけられるような気持ちになったのを覚えています。

その後、Kさんは沢山のことをお話ししてくださいました。失明する以前から、教師になることが夢だったKさんは持ち前の精神力とガッツで大学へ行き、教師

になりました。その頃の制度ではKさんのような全盲の人が教師になることは、非常に難しかったそうですが、制度の改正の為に、何年も諦めずに努力を重ねてやっと夢を叶えられたそうです。音楽が好きで、目が見えなくなってから、独学でピアノをマスターし、時々小さなコンサートを開いておられるそうで、私達に弾き語りも披露してくださったのです。

そして最後に、

「私は目が見えないことは、背が低いとか足が遅いというのと同じように、個性の一つだと思っています。だから他の人と比べて、特別に違っているとは思っていないのですよ。」

とおっしゃったのです。

Kさんは「弱者」でしょうか？とんでもありません。むしろ尊敬すべき「強い人」です。

Kさんに出会う以前の私は、障がいを持つ人は皆一葉に、不自由を強いられ、気の毒で可哀想なので、優しくしなくてはいけない、手助けをしてあげなくてはいけない、と考えていました。Kさんの話を聞いていなかったら、きっと今でもそう考えていたはずですが、しかし、それは健常者の目線でしか物を見ていない思いあがりだったと気づかされたのです。

障がいを持つ人に対して、「気の毒」とか「可哀想」という気持ちで接すること自体、どこかで差別をしているのであり、平等ではないと思うのです。健常者も障がいを持つ人も同じように自分の足で歩いていかなければなりません。「同情」や「おせっかい」から、やみくもに手を貸すのは違うと思います。私達がすべきことは、様々な障がいを持つ人のことをもっと積極的に理解するように努め、それぞれの障がいに応じ、本当に必要な部分だけサポートすることではないでしょうか？

私は、社会は色々な個性を持った人の集まりだという認識で、共に生きていくのが本当だと思うのです。これからもその認識をもって人と接していきたいと思います。